

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 9号」

ベストピアは小原靖夫の
個人誌です。

平成
二十四年
九月
第九号

< 2012年9月 >

古賀 順子

「芸術・文化の秋」

フランスの長い夏のバカンスも、終わってみればあっという間。9月4日から小中学校の新学期が始まりました。我家の斜向いは小学校です。朝夕の送り迎えのお父さん、お母さんに手を引かれる可愛い児童の姿が戻ってきました。パリの日常です。オペラ、バレエ、コンサート、演劇、展覧会などのシーズンも再開しました。パリ国立オペラ座は、「ホフマン物語」(オッフェンバック)からスタートします。芸術・文化の秋到来です。私は、ロダン美術館の催し「ノクターン(Nocturne)」が今季初の観劇となりました。

美しいバラや紫陽花の庭に、躍動感と存在感に満ちたオーギュスト・ロダンの彫刻群が点在するロダン美術館。大好きな場所です。ロダン美術館は国立ですが、独立経営なので、閉館後も各種の催しを行なっています。美術館になっているピロン館の前に長く延びる庭は、オート・クチュールのコレクション発表、有力企業のレセプション、コンサート会場などとしてレンタルができます。今年9月から来年6月まで、毎月第1水曜日閉館後19時から行なわれるのが「ノクターン」です。初回の今月5日は「シャルル・ゴンザレス、カミーユ・クローデルになる」と題した一人芝居でした。舞台監督で、俳優でもあるシャルル・ゴンザレスがカミーユ・クローデルを演じています。舞台はピロン館の石の階段、照明はなく、録音の音楽だけで何の装置もありません。美人で彫刻家としての才能もあったカミーユ。女流芸術家で、ロダンの愛人であったことから、当時の社会からは

厳しい非難を受けます。パリのサン・ルイ島(19, quai de Bourbon)のアトリエで1889年から1913年まで暮した後、1913年から1943年に亡くなるまでの30年間という長い年月を精神病棟で過ごします。今回の劇は、弟ポール・クローデルや家族に宛てた書簡をもとに、その精神病棟時代のカミーユを演じています。晩年になると自分はフランス王家の末裔であるという妄想に取り憑かれ、家族からも見捨てられた女流彫刻家の最期は胸が痛くなります。男性が演じるカミーユは奇妙で、私が思い描いていた女性の心の苦しみや狂気とは違っていました。徐々に暮れていくロダン美術館の庭は独特の雰囲気がありました。芝居が終わって庭を横切って帰るとき、「考える人」を見ました。昼間と違って夜見るロダンの彫刻は、まるで夜だけ魂があるようで、圧倒する存在感に満ちていました。

ロダン美術館に限らず、パリの人たちは夜の外出が好きです。ライトアップされたパリは魅力の一つ。点滅する夜のエッフェル塔は、女王の表現がぴったりです。夜遅くまで開館する日を設けた美術館もあります。また、犬の散歩や特別な用事があるようには見えない人たちが夜の散歩を楽しんでいます。来る9月15・16日の週末は、第29回「文化遺産の日」です。日頃見学できない歴史的建造物やパリの名所を一般公開します。一番人気は、フランス大統領公邸「エリゼ宮」(155, rue du Faubourg St. Honoré)。ガーデン・パーティーでときどき放映される庭も綺麗です。どこも朝から長蛇の列で、現職ジャン＝マルク・エロー氏の首相官邸「マティニョン邸」や国会、天文台などさまざまな場所を見ることができます。パリだけでなく、フランス中が文化遺産に触れる日です。日常から離れて、のんびりと散歩をしながら文化を楽しむひとときは心が癒されます。

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 9号」

ベストピアは小原靖夫の
個人誌です。

平成二十四年九月
第九号

ロダン美術館
「考える人」



(撮影：古賀 順子)